

# Funai Overseas Scholarship 第一回留学報告書

2020 年 6 月  
田場大我

## 1. 自己紹介

2020 年度 船井情報科学振興財団奨学生 田場大我と申します。早稲田大学の創造理工学部建築学科を 2019 年 3 月に卒業し、2020 年 8 月より、アメリカのコネチカット州にあるイェール大学の School of Architecture に進学予定です。留学先では MArch (Master of Architecture) II という修士プログラムに在籍し、建築学のデザイン分野を研究する予定です。

この度は FOS にご支援いただけることになり、大学院留学が可能になったと言っても過言ではございません。特に建築のデザイン分野の学生を FOS が採択するのは今回が初めてと言うことで、今回のレポートを通して私がどのような経緯で建築という分野を選択し、学部を卒業したのちにアメリカ留学を決意したかについて記させていただきます。少々限定的な話になってしまうかもしれませんが、個人的な反省点や受験した大学の印象などについても言及させていただきます。少しでも参考になれば幸いです。

## 2. 米国大学院留学に至るまでの経緯

### 英語学習に関する経歴

留学をするのは今回が初めてではありません。小学五年生の頃から高校一年生までの計 6 年間留学し、現地の寮に住んでおりました。現地と言うミドルスクール (小学五年～中学二年生) の 4 年間をカナダのオンタリオ州で過ごし、ハイスクール (中学三年～高校三年) のうちの 2 年間をアメリカのマサチューセッツ州で過ごしました。留学する以前は日本のインターナショナルスクールに通っていたため、今回の留学受験まで意識的に英語を学習したことはなかったのかもしれませんが、大学の学部生の時は英語の教師アルバイトをしながら、なるべく培ってきた語学スキルを維持するよう努めました。

### 大学院留学を決意したきっかけ

大学の学部受験の際に第一志望に合格したわけではなかったのですが、大学院は外部を受けようと早期より考えておりました。当初の第一志望であった東京藝術大学を受験してもよかったです。せっかく外部を受験するなら視野をもう少し広げてみようと考えようになり、海外の大学に興味を持ち始めたのがきっかけになります。個人的な見解にはなりますが、国内の大学院は少々業務的な作業が多く見受けられ、あまり教育的でないと感じた部

分がありました。国内の大学のほとんどが研究室制度をとるなか、海外の大学はスタジオ制度を主にとり、毎学期スタジオメンバーや教授陣も変わり、様々な交流の場をもてるのが大きな魅力です。また、有名大学になるといわゆる建築業界を牽引する「スター」が教職をとっていることもあります（これは日本でも同様）。彼らは今日に至るまでに私が目を通した文献の著者であったり、作品集をみてきた作家だったりします。私が進学するイエール大学では学部一年生の頃に放映された映画に出演していたピーター・アイゼンマンが教職をとっており、当時はそのような環境に将来的に身をおけることは想像もしておりませんでした。それ以外にも過去にはフランク・ゲーリーや晩年のザハ・ハジドもスタジオを担当していたりとかかなり豪華なメンバーが揃っており、歴史的にも多くの功績を残しています。

多くの建築学生が海外留学を志すことはあるかと思います。しかし、アメリカは特に英語能力が基準を満たしていない場合断念せざるを得ません。手段としては交換留学等もありますが、アメリカの大学は基本的には提携しておらずヨーロッパ諸国へ短期留学する学生が多いのが現状です。語学に関してはさほど気がかりが無かった分、アメリカに行かないのは勿体ないと思うようになりました。

### 3. 出願までの具体的なプロセス

#### 大学を卒業して一年間留学準備に充てる

実は今回受験をするのは二回目で、学部四年の2019年度も受験をしましたがその際は全て不合格という結果でした。今思い返せば提出物の完成度が低く、不合格なのは当たり前ですが、卒業論文と卒業計画（他大は基本的に卒業計画のみ）をどちらも仕上げながらアプリケーションの提出物（主にポートフォリオ）や英語の試験を受けるのは少し無理がありました。早稲田大学の大学院に進学せずに無所属で一年間留学準備に充てましたが、それでも締め切りによく間に合うような事態でした。一年目に英語の試験は全て済ませてしまい、二年目は研究室活動に参加しながら、提出物の準備やハーバード大学が東京で行ったワークショップに参加するなどしながら、アメリカに出願校選定も兼ねて大学を訪問しました。

もし留学を将来的に考えている方がいらっしゃいましたら、作品は常にまとめながらブラッシュアップすることをお奨めします。すると私ほど時間は掛からないかと思います。

#### 留学するには英語はどれくらい必要？

これは、もちろん志望している分野によると思いますが、受験において英語はほとんどの場合足切りという認識をしております。ただし、一番大事なのは留学先でどれだけ実りのある経験を積めるかだと思うので、もし充実した意思疎通が必要なディスカッションが主体になってくるとすればやはり英語は不可欠ですので勉強していて損はないかと思います。どれほどの点数があれば安全圏かは明示できませんが、他の受験生の統計や体験談によ

れば TOEFL100 点以上、IELTS7.0 以上、GRE はあまり関係ないと推測しております。GRE は非常に難しいため、インターナショナル生はあまり取れていなくても大丈夫とハーバードの教授に助言いただきました。私は最終的には TOEFL116 点、IELTS8.0、GRE (Verbal 156, Quantitative 170, Writing 4.0)ほどだったと記憶しております。TOEFL 以外はある程度満足のいく点数が 1 回目を取れたため、それ以降は受けておりません。

出願に必要な英語のテストは大学や国にもよりますが、TOEFL か IELTS は基本的にどこでも必要で、それに加え GRE という統一テストがアメリカの大学では必要な場合が多いです。私の場合基準は超えているものはあまり点数アップを目指さずに他の提出物に時間を割いていました。今後受験を考えている方々は自分が受験する大学の要項や合格者平均を確認しておくことと目標点数なども把握しやすいかと思います。自分の背景上英語が問題になることはさほどなかったため、その点は他の受験生よりも有利に進められたかと思います。やはり、先ほども申し上げた通り英語は足切り程度と認識し、くれぐれも点数アップを目指して時間をかけ過ぎないのがポイントです。

## 出願校選定

出願する大学を選定する作業は入念に行う必要があります。他の受験生に伺った話だと皆さん最低でも 3 校、最高 10 校ほど出願されているようです。私が受験したのは最終的には 7 校でしたが、出願を考えていたのは 10 校ほどでした。早めに合格をいただいた大学があったため残りの三校は受験しませんでした。今思えばここも受けとけばよかったと後悔している大学もあります。人それぞれの興味や関心があるので、一概にどこがいいとは言えませんので、各大学のウェブサイトは要チェックです。どのような研究が行われているのか、誰が教職をとっているのか、卒業生はどのような人がいるのか等の情報はエッセイ (SOP) にも盛り込める内容なので参考になるかと思います。Ivy League はどこも出願形式が似ていて併願もさほど負担にはならないかと思いますのでまとめて出願するといいでしょう。

## 提出物

進学する分野に関わらず、出願に求められるのは GPA、英語のテスト (TOEFL/IELTS や GRE)、エッセイや推薦状 (三通ほど) 等が挙げられます。それに加え、建築学に進学を希望する学生は必ずポートフォリオ (作品集) を求められます。他の分野ですとエッセイ (SOP) と推薦状が特に選定プロセスにおいて重要だと聞いております。しかし、建築の分野だとこのポートフォリオが選定基準の 9 割ほどを占めているように実感しております。ポートフォリオがメインであり、エッセイはそのポートフォリオとの整合性がしっかりあれば十分だと思います。

このポートフォリオの作成には時間を設ける必要があります。出願する大学にもよりますが、少なくとも 3 ヶ月は必要になる作業かと思います。私は 6 ヶ月ほどかかりました。

定期的に友人に確認してもらいアドバイスをもらいならブラッシュアップしていきました。学部生の頃から海外留学を意識した作品づくりをしていたらここまで時間はかからなかったのですが、このポートフォリオは基本的にはオンライン提出になるので、紙媒体で映える、インパクトあるものが求められます。日本の建築学科は少々伝統的な実物主義であるために、海外の基準に合わせるのに少々苦勞しました。もちろん合わせすぎるのも個性の欠落へと繋がってしまいますので、このバランスが難しいところです。大学によってページ数やファイルサイズ指定もありますので、予め確認して作成するといいでしょう。圧縮作業だけでもかなり時間を要します。

## GPA

私にとって GPA は大きな懸念点でした。というのも 3.0 を下回っており、海外の基準からしたら一見「大丈夫か？」と思われても不思議ではないでしょう。早稲田大学の同級生と比べると決して低くはなかったのですが、私が受験した大学では大抵の合格者は 3.5 以上保持しているようでした。しかし、海外の GPA 計算はそもそも日本と相違していたり、日本国内でも GPA の認識は大学によって様々であるように一概にいえないでしょう。補助的な情報を出願する際に記述できる場所があれば、早稲田大学の GPA の計算方法に加え受験大学の基準に合わせるとどれくらいの換算になるのかを記述しました。大学によっては公的な機関に GPA 換算を依頼するよう強いられることもあるようです。

## エッセイ (SOP)

先にも触れておりますが、エッセイ (SOP) を求められます。これはページや文字数の指定があったり、質問に答える形式や自由記述など大学によって様々でした。イエール大学の場合は二つの質問に対してそれぞれ 400 文字ずつで記述、ハーバード大学と MIT は約 2 ページ以内といったように決して長いものではありません。最初ざっと書いてみたところ 2 ページを優に超えていたのでどこを削るかに悩みました。最終的に各大学に提出したエッセイの大枠は変わらないのですが、各大学のスタジオや教授陣についてリサーチをし、自分の興味といかに接点があるのかをそれぞれ記述しました。前にも述べたように基本的に建築のアプリケーションでは大半はポートフォリオで決まると言われているので、このエッセイがどこまで重要視されるのかは分かりませんが、このプロセスを通して自分とそれぞれの大学の相性も俯瞰して見れるようになってくるので、非常に有益な作業だったと後になってから感じております。

## 推薦状

そして、多くの受験生が大変だと口を揃えて言うのが推薦状を集めることです。基本的には大学の教授にお願いするもので、私は研究室の教授二人とハーバード大学に留学をされていた教授にお願いしました。皆さんお忙しいので、執筆依頼はなるべく早いうちにすこ

とをお奨めします。

## 奨学金

留学に際して非常に重要だったのが資金調達です。大学によっては資金の出所を聞かれるため、奨学生だという情報はある程度信頼にも繋がり合否にも関わってくるような気もしております。第一志望に合格しても、条件（大学側から提示される Financial Aid）があまりよくないがために断念する人も結構いるようです。FOS 奨学生として採択されたとの通知をいただいた時は実際に大学院から合格通知をもらった時よりも嬉しかったことを記憶しております。奨学金を獲得することが大学院合格と同じくらい大きな目標として掲げたため、申請書は大変注力し、特に FOS には当時作成中のポートフォリオ等も同封したことも相まって熱意が伝わったのではと勝手ながらに思っております。FOS は学費を全額負担してくれるので非常に助かっているのですが、これがもし他財団で一部負担だとしても大学側の Financial Aid にも併せて申請することができるので、それらを合わせると可能性は広がるかと思えます。

## 4. 出願結果

アメリカの大学からの一番最初の通知は2月にいただき、それ以外は3月に集中しておりました。特に Ivy League はある程度まとまって3月頭に送られてきました。ヨーロッパは出願順から通知をしている様子でしたので時期も受験生間でまちまちです。また、出願が3月に入ってからの大学もあつたりと少しアメリカとはずれているので、アメリカの大学の結果次第で多少調整も可能かと思えます。私の場合アメリカの大学から2月中に合格通知をいただけたために最終的に受験しなかったヨーロッパの大学がいくつかあります。最終的な結果は下記のようなになりました。（通知順）

合格：UC Berkeley M.Arch Advanced Placement（2年コース）、Columbia University MSAAD（1年コース）、Yale University M.Arch II（2年コース）

不合格：TU Delft MSc Architecture（オランダ・2年コース）、Harvard University M.Arch II（2年コース）、MIT M.Arch（3.5年コース）、UCL The Bartlett M.Arch Part II（イギリス・2年コース）

## 5. 最後に

最後にはなりますが、船井情報科学振興財団に採択いただき大変光栄に感じております。建築のデザイン分野の学生を財団が採択するのは今回が初めてということで、その名誉にお答えするべく今後活躍できるよう精進させていただき次第でございます。多岐にわたり多大なるご支援をいただいている船井財団の皆様には感謝を申し上げますとともに、このコミ

ユニティの一員になれたことを誇りに思っております。

また、出願した際にまとめた作品をウェブサイトに掲載しておりますので、ご参考までにご覧いただくと幸いです。

<https://tsquarednijou.wixsite.com/mysite>

以上にて報告を終了させていただきます